

【注釈】

『古本説話集 全注釈』大齋院事<sup>（おほむけいんじやう）</sup>（第二）

其の二（六丁オ7～九丁ウ1）

*Kohonsetsuwashu Zenchushaku Osainnokoto* :

Fumi SHIIBA  
Motoko ABE  
Reiko KAWANAMI  
Fumiko NAKAMURA  
Yoshikazu FUKUDA  
Yasuko YAMAGUCHI

椎葉 富美  
安倍 素子  
川浪 玲子  
中村 文子  
福田 益和  
山口 康子

## 要約

『古本説話集』は、編者未詳。成立は平安末期から鎌倉初期と言われている古写本である。唯一の伝本である旧梅澤記念館蔵鎌倉中期写本（現東京国立博物館蔵）には、題簽も内題もないため、本来の書名も不明であり、一般に『古本説話集』と呼ばれている。

流麗な平仮名文で、大齋院選子内親王の話に始まり、関寺の牛仏の話で終わる。王朝文学の著名人を中心に樵夫や貧女の話に至るまで有名無名人の逸話や観音靈驗譚などが収められている。『今昔物語集』以下の諸説話集との共通話も多いが、書承関係は明らかになっていない。

本稿は、昨二〇一六年から始めた『古本説話集』の注釈「大齋院事（第一）」の「其の二」として、先稿に引き続き、六丁オ7から九丁ウ1までの注釈を試みるものである。

「本文」は、原文に復元できることを目指す一方、読みやすさも考慮し、比較的便のため、「対照説話」を本文の下段に記した。「口語訳」は、平易かつ明確な現代文を用い、原文の雰囲気も伝えることも意識した。「語釈・語法」は「注釈」の根拠を示し、特に語学的視点を多く取り入れるように心がけた。さらに「補説」として、「注釈」における重点箇所を特記した。

キーワード 古本説話集・大齋院・雲林院

## 解題

『古本説話集』（以下、「本集」と略称）は、昭和二十四年「新指定国宝展」で世に知られた。翌年、梅澤彦太郎氏の所有に帰し、以来、題簽も内題もないため「梅澤本 古本説話集」と称されることが多い。梅澤記念館・文化庁旧蔵、現在は東京国立博物館所蔵である。

本書の書誌等については、『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編 貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）の田山方南氏の解説、および『梅澤本 古本説話集』（古典資料類従六・勉誠社・一九七八年）の川口久雄氏の解説に詳しい。墨付全部一三六丁。奥書識語はなく、冒頭二丁オ7、四丁オ、および六〇丁ウ7、六二丁ウに、目録（漢字表記の説話表題を本文の説話配列に従って列記したもの）がある。全七十話が、前半四十六話、後半二十四話に二分され、一般に前半を上巻、後半を下巻と称されている。

本書の説話は、『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と、『世継物語』、『打聞集』などとの重なりも多く、類縁性や前後関係が論じられてきた。しかし現在のところ、諸説話集の伝本の一つ、あるいは異本・抄本とは考えにくく、また、どの説話集とも相互の承接関係は証明されず、それらの諸説話集との共通祖本が想定されている。現在のところ、天下の孤本とみるべきである。

成立年代、著者（編者もしくは筆録者）、成立事情等は不明であるが、『古本説話集総索引』（山内洋一郎編・風間書房・一九六九年）の刊行以来、日本語史的な観点からの研究も進められている。鎌倉中期筆写と思われる貴重な古写本である。

凡例

一 表題

本集には、説話表題（説話本文の前に記載された表題）は見られないので、目録表題をそれぞれの該当説話本文の前に掲げ、訓読を振り仮名の形で示す。その根拠については、各説話の口語訳の次に、項目を立てて述べる。また、川口久雄校訂『梅澤本 古本説話集』（岩波文庫・一九五五年）以下の研究書にならぬ、説話の話番号を（ ）をつけて付し、（第一）（第二）の形で示す。

二 本文

1 底本は、東京国立博物館所蔵（梅澤記念館・文化庁旧蔵）『古本説話集』を用いた。『梅澤本 古本説話集』（貴重古典籍刊行会編 貴重古典籍刊行会発行・一九五五年）、『古本説話集』（勉誠社文庫124・川口久雄解説・勉誠社・一九八五年）、『e國寶 国立博物館所蔵 国宝・重要文化財』（<http://www.emuseum.jp/>）を参照する。

2 底本の二丁を二頁として、表をオ・裏をウと表記し、行数を本文の上に算用数字で記す。なお、勉誠社文庫の頁数を（ ）で示す。

3 原文の漢字はそのまま漢字で表記し、原文に近い字体を選ぶ。

4 訓みをつけるときは、歴史的仮名遣いを用い（ ）で囲む。

例 大齋院（だいさいいん）・申（まう）は

5 反転記号・繰り返し記号・見せ消し等は原文どおり表記し、必要に応じて注をつけるが、「語釈・語法」の項で説明する。

6 本文の仮名表記を、漢字表記にするとときは、振り仮名として原文の仮名をつけた。表記する漢字は、現行の漢字とする。

7 仮名遣いは、右側に正用を【】で示す。

8 必要に応じて句読点・濁点・引用符をつけ、会話文には「」をつける。

9 一語が一行にまたがる場合は、どちらかの行にまとめる。

例 九丁オ7～8 物語（ものがたり）

三 対照説話

対照すべき説話を、本集本文の行切りに合わせて記載する。テキストは、「新日本古典文学大系」など、一般的なものを選ぶ。

四 口語訳

逐語訳を心がけ、必要に応じて適宜主語等を（ ）で補つ。

五 語釈・語法

丁の表（オ）・裏（ウ）ごとに、該当箇所の行数を算用数字で示し、特に語学的視点を取り入れるよう心がける。

六 補説

特に詳述する必要がある問題についての考察を記す。

七 類話

紙幅の都合上、各話の末尾につける予定である。

八 参照テキスト

略号とテキストは次のとおりである。

岩波文『梅澤本 古本説話集』川口久雄校訂・岩波文庫・一九五五年

全書『古本説話集』日本古典全書・川口久雄校註・朝日新聞社・一九六七年

総索引『古本説話集総索引』山内洋一郎編・風間書房・一九六九年

全註解『古本説話集全註解』高橋貢・有精堂・一九八五年

新大系『古本説話集』新日本古典文学大系42・『宇治拾遺物語』と併録・

中村義雄、小内一明校注・岩波書店・一九九〇年

全訳注『古本説話集 上下』高橋貢全訳注・講談社学術文庫・二〇〇一年

九 参考文献

参考にした文献については、できる限り該当部分に書き入れる。記載できなかったものは、各話の末尾につける予定である。

大齋院事(第一) 其の二①(六丁オ7) 七丁オ3)

【六丁オ】(一五頁)

- 7 後一条院・後朱雀院、まだ宮たちに
- 8 て、幼くおはしましけるとき、祭見せたまつ
- 9 らせ給けるに、御棧敷の前過ぎさせ給ほど、
- 10 殿へ御膝に、二所ながら据ゑたまつらせ

【六丁ウ】(一六頁)

- 1 給て、「この宮たち見たてまつらせ給へ」と申させ
  - 2 たまへば、御輿の帷より、あか色の御扇
  - 3 のつまをこそ差し出ださせ給たりけれ。殿をはじ
  - 4 めまいらせて、「なを心ばせめでたくおはする院なり
  - 5 や。かゝるしるしを見せさせたまはずは、いかでか
  - 6 見たてまつらせたまふとも知らまし」とぞ、感じ
  - 7 たてまつらせ給ける。院より大殿に聞こえさせ
  - 8 給ける。
  - 9 ひかり出づるあふひのかけを見てしかば
  - 10 年経にけるもうれしかりけり
- 【七丁オ】(一七頁)
- 1 御返、
  - 2 もろかづら二葉ながらも君にかく
  - 3 あふひや神のしるしなるらん

口語訳

後一条院・後朱雀院がまだ宮様で、幼くていらつしやったとき、賀茂祭をお見せ申し上げなされたが、(お三方の)御棧敷の前を(大齋院のお輿が)お通りになるあいだ、入道殿(道長公)のお膝にお二方とも座らせ申し上げな

『大鏡』(日本古典文学大系21・一九六〇年・岩波書店、底本：東松本)

この當代や東宮などのまだ宮たちに  
ておはしましゝとき、まつりみせてまつ  
らせたまひし御さじきのまへすぎさせたまふほど、  
ゝの御ひざに二所ながらすへたてまつらせ

たまひて、「このみやたち、みたてまつらせたまへ」と申させ  
たまへば、御輿の帷より、あかいろの御あぶぎ  
のつまをさしいでたまへりけり。殿をはじ  
めたてまつりて、「なを心ばせめでたくおはする院なり  
や。かゝるしるしをみせたまはずは、いかでか、  
みたてまつりたまふらんとも知らまし」とこそ、感じ  
たてまつらせたまひけれ。院より大殿に聞こえさせ  
給ひける、

ひかり出づるあふひのかけをみてしより、  
としつみけるもうれしかりけり。  
御かへし、  
もろかづらふたばながらも、きみにかく  
あふひやかみのゆるしなるらん。

さつて(道長公が大齋院に)「この宮様たちをこ覧申し上げください」と申し上  
げなされた、御輿の垂れ布から、赤色の御扇の端を差し出された。入道殿を  
はじめ申し上げて、「やはり心配りがすばらしくていらつしやる院ですね。こ

のような合図をお見せにならなかつたならば、どうして（大齋院が）見申し上げなかつたということがわかりましようか」と感心申し上げなかつた。院（大齋院）から大殿（道長公）に申し上げなかつた歌は

ひかりかがやく二葉葵のような お二方の日嗣のみこのお姿をみました  
ので、年月が経った（私が年をとりました）こともうれしゅうございます  
（大殿の）御返歌は

もろかつらを頭に懸ける葵祭の日に、幼いながらもお二方の日嗣のみこ  
が、あなたにこのよみにお逢いできるのは賀茂の神のご利益なのでしゅう

語釈・語法

【六丁オ】

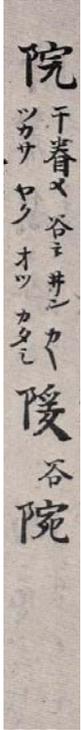
7 後一条院・後朱雀院、後一条院（一〇〇八～一〇一六）第  
六十八代天皇、名は敦成、後朱雀院（一〇〇九～一〇一五）第  
六十九代天皇、名は敦良、両天皇とも一条天皇の皇子、母は藤原道長女の  
宮彰子。両天皇ともに第五十話に登場。本用例の「後朱雀院」の「院」の字  
は俗字であるが、『類聚名義抄』には記載。本集には、「院」の字が四十四例  
（本話には十八例）あるが、「院」の字を使用しているのは、六例（二オ1・三  
オ4・五オ1・六オ7・七オ6・七オ9）のみ。



『e 國寶 国立博物館所蔵 国宝・重要文化財』  
(<http://www.emuseum.jp/2456/>)  
本集の影印引用は、以下すべて同じ

『類聚名義抄 観智院本』（法中・二二オ5）

（天理図書館善本叢書32・八木書店・一九七六年・以下、『名義抄（観智院本）』とする）



7 また宮たちにて、後一条院・後朱雀院が即位される前の親王であったと  
いうこと。また、は、ある段階や状態になつていないようす。

補説1

8 祭 『栄花物語 上』（巻第八「はつはな」）は、この賀茂祭を寛弘七年（一〇  
一〇）とし、四月には、殿 一条の御さじきに「てわか宮」にも御覽せさせ  
給（『日本古典文学大系 以下「大系」と略す・P.294・岩波書店・一九六四年）と、道  
長が三歳になった若宮（敦成親王）だけをお抱きになつてしているとす。『御堂  
閑白記』では、寛弘八年（一〇一〇）四月の記事に「十八日、辛酉、木定、賀  
茂祭、晝従内若宮・三宮・尚侍同道御一条家散（棧）敷室（『大日本古記録御  
堂閑白記 中』P.102・岩波書店・一九五三年）とあり、若宮（敦成親王・三宮）敦良親  
王（そらつての見物は、翌八年のこととする）。

補説3

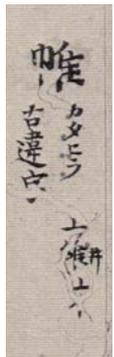
9 棧敷 「棧敷」は、祭礼の行列などを見物するため、行列の進路の両側な  
どに設置された観覧用の席。棧敷の早い例として、『栄花物語 上』巻第八  
「はつはな」には、「殿は、一條の御さじきのやながくとつくらせ給て、  
ひはだきぎ・かつらんなどいみじうおかしうさせ給て」（大系・P.293・用例の  
傍線は筆者による。以下同じ）と造作した藤原道長の一条棧敷が挙げられる。こ  
れが示すように、その流行は一条朝のころからで、隆盛を極めたのは院政期  
である。『色葉字類抄（以下『字類抄』とする）』には『さじき』『さんじき』の  
両形が混在している。本集用例は他に、「さじき」（八オ2）。いずれも仮名  
表記である。

10 二所ながら お二方とも。「所」は、身分ある人を数えるのに用いる語。  
本用例以外に、「たふたふたころして嘆きたまふことよりほかにし」（四  
オ1）があり、宮腹である兵部大輔とその妻を指す。「ながら」は数詞や副  
詞を受けて、「すべて」「…とも」の意を表わす。本集には、「さながら」二  
例を含めて二十七例ある。同じ意味を持つのは本用例の他に八例（七オ2・五  
四ウ5・五五ウ2・八六ウ8・八六ウ9・九三ウ1・一〇一オ9・二二オ6）である。  
10 据え 座らせ。「行下二段」据つ」の連用形。初出は、『古事記』、『日本國

語大辞典 第二版』小学館による。以下、『田圃』。「据つ」から転じたヤ行下二段「据ゆ」の初出は、『宇治拾遺物語』(『日圃』による)である。なお、『字類抄』(三巻本・黒川本)、『名義抄』(観智院本)には、「居」のよみとして、「スフ」が記載されている。『今昔物語集』(新大系・以下、『今昔』とする)の「居(据)」は、「スフ」のよみのみ一〇〇例が確認される。『宇治拾遺物語』は、「スフ」十二例、「スユ」二例となっている。『日本語法史 鎌倉時代編』(P45・岩井良雄・笠間書院・一九七一年)には、『据ふ』は、『植つ』、『飢つ』、『据う』と、わ行下二段活用として使われるのが平安時代の常であった。は行に活用させるのは、鎌倉時代に入ってから現象である」とある。本集には、「すゑ」九例(六才10・一四才10・五六才6・六六才8・六八才2・一〇八才5・一一六才10・一二六才2・一三〇才9)、「すえ」(九六才7)一例、計十例用いられている。

【六十一】

2 御輿 本集では本用例のみ。『枕草子』(新日本古典文学大系 以下、『新大系』と略す・岩波書店・一九九一年・底本は陽明文庫蔵本)に、「みこし」という仮名書きが二例あるので、「みこし」とよむ。『源氏物語』(源氏物語大成普及版・池田亀鑑・中央公論社・一九八四・一九八五)には仮名書き例はない。屋形・箱に人を乗せ、長柄を肩で担ぐ御輿と、長柄に紐を結んで肩からかけて手で腰に支える腰輿がある。肩輿には鳳輦と葱花輦(単に花輦ともいい、屋形の頂に先のとがった丸い葱花に似た形を据えているのでい)がある。鳳輦は天皇の晴の行幸に用いられ、葱花輦は天皇・皇后・斎王が用いた。  
2 帷 几帳 御帳 壁代などに用いて、へだてとするたれ布。夏は生絹、冬は練絹を用いる。本集用例は他に七例(五四才2・六六才2・一〇〇才2・一〇〇才5・一〇〇才9・一〇一才1・一〇一才2・一〇一才7・一一九才7)がある。『名義抄』(観智院本)に次のようにある。「かたむす」と第三音は濁音によむ。



『名義抄』(観智院本)『法中』(五四才1)

2 あか色 本集では本用例のみ。色を表す「あかし」は二例あり、いずれも仮名書きである。『字類抄』(三巻本)には、「赤・朱・赭・楮・丹・赫・緋」など多くの漢字を「アカシ」「アケ」とよんでいる。『全書』(丹色)、『岩波文』(あか色)、『総索引』、『全註解』、『新大系』、『全訳注』は、「赤色」。前田雨城氏によれば、「あか」は、夜明けなどに感じる明るさ、さらに周囲よりみて明るいと感じるときはなやかさも、一括して「あか」というよび名でよんでいる。「あ」と人間の文化史38 色染と色彩 P70・法政大学出版局・一九八〇年)と同じ。

2 扇 本用例の他に、本集には二例(一七才8・一七才9)ある。九世紀ころ日本で発明され、『和名類聚抄』では、「おんぎ」と「うちわ」を区別する。檜または杉の薄板を糸で綴じ、一方を要として開閉できるようにした檜扇(冬扇)が先に生まれ、少し遅れて竹または木の骨に紙を貼付した蝙蝠扇(夏扇)が発明された。四月一日の衣替えでは扇も夏扇にかえたが、正式な儀式では夏でも檜扇が使われた。賀茂祭の行列の行きは冬扇、帰りは夏扇であった。天皇と皇太子は蘇芳染の檜扇で赤檜扇とよばれ、公卿・殿上人の白檜扇と区別した。女性の檜扇は、皇太后宮・皇后宮が赤色という以外は、男性と違い、自由であった。

3 つま ものほじの部分。へり。「あぶぎのつま」は、本用例のみ。「よしあるあぶぎのつまをおりて」(新大系『源氏物語』一巻巻・P29)、「やあぶぎのつまをひきやりて」(大系『栄花物語』下巻三十一「調合」P37)、「あぶぎのつまにいとちあせく」(略)とかきて」(新大系『堤中納言物語』)のつまはP16)などの例がある。なお、『栄花物語』上巻は「御あぶぎをさしてさせ給へるは」(大系・巻第八「はつはな」P24)とよむ。

4 まいらせて 既出（全注釈其の一）P11。純心人文研究 第23号『長崎純心大  
学・二〇一七年。以下、全注釈其の一とする。補助動詞としての用法は、院  
政時代から「聞こゆ」「奉る」に代わって盛んになった。『大鏡』は「たてま  
つりて」となっている。

4 心はせ 性格や性質にもとづいた心の動き。吉澤義則氏は「心ばせ」は  
『性質』を第一義とし、転じて『理解性』の義に用ひられたものである。『  
増補源語釋義』P33。臨川書店・一九七三年）とする。『名義抄（観智院本）』の  
よみは「こころはせ」「こころはせ」両方あるが、ここでは「こころばせ」  
を採る。本集用例は、他に一例（二二ウ）。

5 ずは 打消の助動詞「ず」の連用形に係助詞「は」がついたもの。「ず」  
の未然形に接続助詞「ば」の清音化した「は」がついたものとする説もある。  
打消の順接仮定条件を表す。「もし〜でないならば」の意。「ずははまし」  
と呼んでいる。

6 感じ 本集用例は、他に一例あるのみ。「かみ、いみしうかむしあはれか  
りて」（五ハオ9）

補説2

7 院より大殿に 大齋院（選子）から大殿（道長）に。この贈答歌は、『後拾遺集』  
雑五（新編国歌大観・角川書店・一九八二～一九九二年）・『栄花物語 上』（巻第八は  
つはな大系・P24）にも選子と道長の贈答としている。しかし、『大鏡』（大系・  
P124）には「大殿」ではなく「太宮」とある。また、『上東門院』の書き入  
れがあり、補注（P456）に『太宮』は『大殿』の誤である。とある。歌  
も本集と『大鏡』では文言が異なっている。

補説3

9 あふひのかけ 二葉葵のような一人の白駒の皇子の姿。「あふひ」は「葵」  
に「逢ふ日」を掛けた詞。「日」に「ひつぎ」の意味を持たせる。  
「葵」に「逢ふ日」を掛ける用例として、次のような例がある。

作主未詳 詳歌一首

『万葉集』巻第十六

3856 なしなつめきみにあはつききはふくすのちもあはむとあふひはなせく

1077 人もみなかつらかさしてちはやぶる神のみあれにあふひなりけり  
3952 おもふなかけに糸ひにし我なればあふひならではやむくすりなし  
（古今和歌六帖）  
（いずれも『新編国歌大観』による）

【七丁オ】

1 御返（みかへし）『大鏡』の「御かへし」により「返」は「かへし」とよむ。本集  
では「御かへし」四例（七オ1・一九ウ2・二三ウ10・五七オ1）、「かへし」四  
例（二ハオ6・三二オ10・三二ウ1・三二ウ2）である。「御かへり」は一例（四  
九オ9）のみ。

2 もろかつら 葵祭で、頭に懸ける桂の葉に二葉葵の葉をつけたもの。「も  
ろ」にも「二人」の意味を持たせる。

2 二葉ながらも 「二葉」は「幼い」意と「二人」の意を持つ。「ながらも」  
は体言または活用語の連体形を受け、「…にもかかわらず」の意を表す。「二  
所ながら」（既出・六オ10）は「お二方ともに」の意。

2 かくあふひ 「斯く逢ふ日」に「懸く葵」の語をきかせている」と『総  
索引』注三（P13）に指摘がある。掛詞とみる。

3 神のしるし 賀茂の神の利益のこと。

其の二②(七丁オ4〜八丁オ1)

【七丁オ】(一七頁)

- 4 めでたく、心にくく、をかしくおはしませば、上達部・
- 5 殿上人、絶えずまいりたまへば、たゆみなく、うち解けずのみありければ、「齋院ばかりのところはなし」と、世にはづかしく心にくき事に申つゝ、
- 8 まいりあひたりけるに、世もむげに末になり、院の御年もいたく老させたまひにたれば、今はことにまいる人もなし。人も

【七丁ウ】(一八頁)

- 1 まいらねば、院の御有様もうち解けにたらん、若く盛りなりし人、もみな老失せもていぬらん、心にくからで、まいる人もなきに、後一条院御時に、雲林院 不断の念佛は九月十日
  - 5 のほどなれば、殿上人四五人ばかり、果ての夜、月のえもいはず明きに、「念佛にあひに」とて、雲林院に行きて、丑の刻ばかりに帰るに、齋院の東の御門の、細目に開きた
  - 9 れば、そのころの殿上人・蔵人は、齋院の中も、はかしく見ず、知らねば、「かゝるついでに院の
- 【八丁オ】(一九頁)
- 1 うちみそかに見む」と言ひて、入りぬ。

『今昔物語集』巻第十九村上天皇御子大齋院出家語第十七

(新日本古典文学大系36・一九九四年・岩波書店・底本：東大本甲)

注東大本甲の目録表題では、「出家」とある(新大系P101)。また、『今昔』(大系五・一九六二年)の巻第十九の校異535によると、底本には、「家歌」と朱補と書き入れがある(P366)。よって、「家」を入れた

世二微妙ク可咲クテノミ御マセバ、上達部・

殿上人不絶又参レバ、院ノ人共毛緩ム事無ク、打

子不解ズシテノミ有レバ、齋院許ノ所

無シトナム世ノ人皆云ヒケル。

而ル間、漸ク世モ末ニ

成リ、宮ノ御年モ老ニ臨マセ給ヒニ

タレバ、今ハ殊ニ参ル人モ無シ。

然レバ院ノ有様モ、参ル人シ無ケレバ、打子不解ス、

亦若カリシ人トモ皆老ニタレバ、

心慥ガリテ参ル人モ無キニ、後ノ一条ノ院ノ

天皇ノ御代ノ末ノ程ニ、心有ケル殿上人四五人許、西ノ雲林院ノ不断ノ

念仏ハ九月ノ中ノ十日ノ程ノ事ナレバ、其ノ念仏ノ終ノ夜、月ノ

艶ズ明ナリケルニ、念仏ヲ礼ムガ為ニ、此ノ殿上人共雲

林院ニ行テ、丑ノ時許ニ返ケルニ、

齋院ノ東ノ門ノ細目ニ開タリケ

レバ、近來ノ殿上人・蔵人ハ、齋院ノ内ヲ

墓トシクモ不見ネバ、「此ル次ニ、院ノ

内窃ニ見ム」ト云テ、入ヌ。

口語訳

（大齋院はすばらしく、奥ゆかしく、興趣に富んでおられ、上達部や殿上人たちが絶えることなく参上なさっているので、（御所の人々は）絶えず気を張りつめてばかりで、（上達部や殿上人は）「齋院（の御所）ほど（すばらしい）所はない」と、たいそう立派で奥ゆかしいことと申し上げては、参上しあつていたが、世もすつかり末になり、院も大変年老いてしまわれたので、今では特に参上する人もいない。だれも参上しないので、院の御様子もしまりがなくなつてしまつたのであるう、（また）若くてはたらき盛りだつた女房たちもだんだん年をとりおそばになくなつてしまつたからだろう、心ひかれる気持ちがなくなくなつてしまい、参上する人もなくなつていたが、後一条天皇の御代のこと、雲林院の不断の念仏は九月十日の頃なので、殿上人四、五人ほどが、その念仏の最後の夜の月がなんと見え明るい時に、「念仏をおがみに参ろう」と言つて雲林院に行き、丑の時刻ごろに帰る際、齋院の東側の門が細目にあいており、その頃の殿上人や蔵人は、齋院の中もはつきりと見たことはなく知らないで、「このよつな機会に、齋院の中をこっそり見ていこう」と言つて、中に入った。

語釈・語法

【七丁オ】

4めでたく、心にくく、をかしくおはしませば、大齋院に対する賞賛・憧れ・評価する気持ちをいう。「めでたし」「をかし」は、既出（全注釈 其の「p.13・15」）。「心にくし」は、心ひかれ奥ゆかしいの意。本話には、「めでたし」「七例」；「心にくし」四例（七オ4・七オ7・七ウ3・一オ2）；「をかし」四例使用されている。「をかし」の一例（九ウ9）以外は、いずれも、大齋院

という人物もしくは齋院御所に関する事柄について用いられている。この後、「ば」の形の接続語が三つ続いて「まいりたまへば」「ありければ」文のつながりがやや曖昧になつてはいるが、次々と下にかかつてゆく形とみてよい。次の一文（七オ10）「人も」ハオ「いりぬ」も、接続助詞「ば」が四つ続く長文になつてはいる。

4 上達部・殿上人。「上達部」は、摂政・関白以下、参議および三位以上の上級官人の総称。「殿上人」は、清涼殿の殿上之間に昇ることを許された人。平安中期頃より、上達部に次ぐ身分を表わす称となつた。「上達部」の用例は四例、そのうち仮名書き用例は二例、いずれも「かむたちめ」（四ウ8・一三四オ8）である。「殿上人」の用例は七例、仮名書き用例無し。

5 絶えずまいり給へば、たゆみなく、うち解けずのみありければ、「絶えず」は、本用例のみ。「まいり」は仮名違い、既出（全注釈 其の「p.11」）。「たゆみなく」は本用例の他に本話に一例（一オ4）、「うち解けず」は本用例の他に四例（七ウ1・四ウ9・四二オ8・四二ウ8）である。ここでは、齋院御所が不意の訪問客に備えて、絶えず気を張りつめている様子を表している。さらに、副助詞「のみ」を用いることにより、緊張に満ちた様子を強調している。

6 齋院はかりのところがなじ、齋院はとすばらしいところはなない。『全注釈』全訳注では「齋院の御所ほどにぎわい、華やかなところはなない。」「とする。『今昔』（大系四・p.97）の頭注も「上句及び次段冒頭の文の末とを併せ考えると、この齋院ほど多忙な、人の出入のはげしい所は他に無いものだ、の意と取るべきである。』」とする。しかし、『今昔』には、『古本』の次の「世にはづかしく心にくき事」の部分がなく、「世ノ人皆云ヒケル」とある。よつて、『全書』の「齋院ほどすばらしい雲囲気の所はない。」「新大系」の





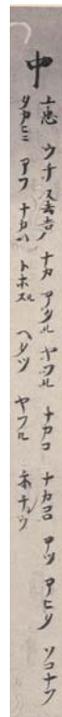
4・六九〇七、「ひんがし」七例(四〇〇一・六二ウ九・六三〇一・六七〇一・六九〇二・六九〇七・六九〇九)。「みかど」の仮名書き例は本用例のみ。「門」の仮名書き例が他に「例ある」「しせんのかたの御かと」(六九ウ三)。「無名草子」にも「本院のみかど」(「無名草子 注釈と資料」p.111)とある。「今昔」は「門」とする。

9 そのころの殿上人・藏人は、齋院の中もはかしく見えず、知らねば、この部分は、注釈的に挿入したものの。「そのころ」は、『今昔』では「近来」とする。『源氏物語 橘姫巻』「そのころ、世にかずまへられたまはぬふる宮おはしけり」。(大系四・p.27)の頭注に「句宮・紅梅・竹河の巻時代で、都には、句宮・薫・玉鬘の娘達に関する色々の問題のあつた頃」とあり、補注には、「句宮巻」・「紅梅巻」・「竹河巻」などの記事を概略的に「その頃」と言った。これは局面を一転させる時の手法である。(p.52)とある。本用例も、挿入句ではあるが、局面を一転させている。本集では、「そのころ」五例(七ウ九・三六ウ七・三九オ五・四五オ三・二一九ウ七)、「このころ」一例(五ウ七)である。「藏人」は、藏人所の役人、六位でも昇殿が許されていた。本集用例は他に三例(二四ウ七・二一九ウ六・二二〇オ六)、一例(二一九ウ六、くら人)を除いて、漢字表記。「はかしくし」は、姿や形が、はつきりしていること。本集では、九例(七ウ10・二ウ8・二二オ1・二二オ4・四五オ2・五八オ4・七六オ9・二一九ウ1・二二七ウ1)ある。

9 齋院の中も「中」は、『名義抄(観智院本)』によると、「うち」にも「なか」にもよむ。本集の「うち」の仮名書き用例は、二十二例。内訳は、建物や部屋の中(院・家・殿・阿弥陀堂・寺・房・宮・蔵・牛屋)十一例、境の中側(連

子・箱・中門の脇・四五町・犬防ぎ・圍)六例、内裏五例である。本集の「うち」の用例は、すべて空間的にある境界線に区切られた内側全体の意を表す。「なか」の仮名書き用例は八例。七例は、「つたよむともからのすくれたらん」かに、「はかしくしからぬうたかゝれたらむ」(二二オ4)のように、同類のものが数多くある場合に、そのなかの一つを特にとりあげて示している。残り一例は、「てゝもはゝも、たゝふたりのなかにふせて、をしぶることをのみなむ、し給ける」(四〇ウ6)と、二人に挟まれている空間を指す。よって、ここは齋院という空間に区切られた場所であるので、「うち」とよむ。ちなみに、『今昔』も「齋院ノ内ヲ」とある。

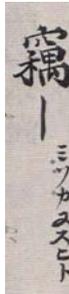
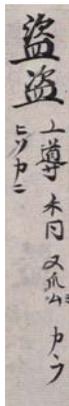
『名義抄(観智院本)』(仏上上四三三オ6)



10 「かゝるついでに院のうちみそかに見む」「みそかに」は、『今昔』では、「窃(ひそか)」「(新大系)」「竊(ひそか)」「(大系)」となっている。『字類抄』には、「ひそかに」のよみの記載はあるが、「みそかに」はない。『名義抄(観智院本)』は、「ヒソカニ」と、「ミソカヌスヒト」両方のよみがある。なお、『日国』「みそか」の補注には、「漢文訓読文に用いられる『ひそか』に対して和文脈に用いられた」とある。本集には、第一話のみ二例(八オ1・八オ4)、第十七話には、「みそかを」と「一例(二七ウ9)が使用されている。

『名義抄(観智院本)』(僧中八ウ7)

(僧中八ウ8)



其の二③(八丁オ1~九丁ウ1)

【八丁オ】(一九頁)

1

夜のふけに

夜深更

2 入りて、東の対の北面の軒に、  
3 みそかに居て見れば、御前の前裁、心にま  
4 かせて高く生いしげりたり。「つくろふ人も  
5 なきにや」と、あはれに見ゆ。露は月の光に照ら  
6 されてきらめきわたり、虫の声「さまさま」  
7 に聞こゆ。遣水の音のどやかに流れたり。  
8 そのほど、露音する人なし。船岡のおろ  
9 しの風、冷やかに吹ききたれば、御前の御簾の

【八丁ウ】（二〇頁）

1 少しうち揺るぐにつけて、薰物ノ香の、え  
2 もいはず香ばしく、冷やかに匂ひいでたる香を  
3 かくに、御格子は下ろされたらんに、薰物ノ匂  
4 ひのはなやかなれば、「いかなるにかあらむ」と思ひて、  
5 見れば、風に吹かれて、御几帳少し  
6 見ゆ。御格子もいまだ下ろされぬなりけり。  
7 「月御覽ずとて、おはしましけるまゝにや」  
8 と思ふほどに、奥深き箏の平調  
9 に調められたる音の、ほかに聞こゆる  
10 に、「さは、かゝる事も世にはあるなりけり」と、あさま

【九丁オ】（二二頁）

1 しくおぼゆ。よきほどに調められて、音もせ  
2 ずなりぬれば、「今は内裏へ歸りまいりなん」と思ふほど  
3 に、人々の言ふ様、「かくおかしく、めでたき御有様  
4 を、「人聞へけり」と思し召されん料に、知ら  
5 ればや」など言へば、「げにさもある事也」とて、寢殿の  
6 丑寅の隅の妻戸には、人のまいりて、女房に  
7 会ひて、もの言ふ所也、住吉の姫君の物語  
8 の障子、そこには立てられたる、そなたに

又レバ、人影毛不為ス。東ノ屏ノ戸ヨリ  
入テ、東ノ対ノ北面ノ檐ニ  
蜜ニ居テ見レバ、御前ノ前裁心ニ任  
セテ高く生ジ繁タリ。「疏ノ人毛  
無ニヤ有ラム」ト哀レニ見ユ。露八月ノ光ニ被照  
テ 〔 〕 牛渡タリ、虫ノ音八様ト  
二聞ユ。遣水ノ音 〔 〕 ヤカニ流レタリ。  
其ノ程、露人音無シ。船岳下  
ノ風水ヤカニ吹タレバ、御前ヘノ御簾

少シ打手動ニ付テ、薰ノ香

艶ズ靄ク氷ヤカニ匂ヒ出タルヲ

聞グニ、御隔子ハ被下タラムニ、此ク薰ノ匂

ノ花ヤカニ聞ユレバ、「何ナルニ力有ラム」ト思テ

見遣ハ、風ニ被吹レテ、御几帳ノ裾ソ少シ

見ユ。早ウ御隔子毛不被下デ有ケル也ケリ。

「月ナド御覽ズトテ不被下ザリケルニヤ有ラム」

ト思フ程ニ、奥深キ箏ノ音少許聞ユ。律ニ被立テ平調

ノ音ナリ。髯ニ聞ケバ、掻合せ、楽一ツ許有リ。此レヲ聞ク

ニ、微妙キ事無限シ。

箏ノ音不為ス

成又レバ、「今ハ内ニ返リ参ナム」ト為ル程

ニ、一人ノ云ク、「此ク微妙ノ可咲キ御有様

ヲ人毛聞ケリト思シ食サムニ、「女房ニ令知

バヤ」ト云ヘバ、「現ニ然モ有ル事也」トテ、寢殿ノ

丑寅ノ角ノ戸ノ間ハ、人參テ女房ニ

会フ所也。住吉ノ姫君ノ物語

リ書タル障紙被立タル所也。其二

- 9 人二人ばかり歩み寄りて、気色ばめば、  
 10 かねてより女房二人許、物語して居て  
 【九丁ウ】(一二二頁)  
 1 たりけり。

口語訳

夜がふけたので、人影もない。東側の塀の入り口から入って、東の対屋の北側の軒下にこっそりとすわってみると、御前の庭先の植え込みは勝手気ままに高く茂っている。「手入れをする人もいないのだから」と、しんみりと思われる。露は月光に照らされて辺り一面きらきらと輝いていて、虫の鳴き声がさまざまに聞こえる。遣り水の音は静かに流れている。その間、少しも音をたてる人はいない。船岡山から吹きおろす風が、冷たく吹いているので、お部屋の前すだが少しゆれ動くに従って、薫物の香りがいいようもなくよくかおり、冷やかに(吹く風に)ただよってくる香りをかぐと、御格子は下ろされていらっしやるのであるつのに、薫物の香りがきわだつて強いので、「どうしてなのだろう」と思つて目をやると、(御簾が)風に吹かれて御几帳が風にゆらいて少し見える。なんと、御格子をまだ下ろしていらっしやるのであつた。「(大齋院が)月を御覧になるおつもりで、そのままいらっしやるのであつたか」と思つうちに、深みのある平調に調整されている琴の音が、かすかに聞こえるので、「ああそうか、このようなくともこの世にはあるのだなあ」と、(殿上人たちは)すばらしく思われる。ちよつとよい長さに奏でられて、琴の音もしなくなったので、「今は内裏へ帰参しよう」と思つ時に、人々が言うには、「このように趣深く、すばらしい御様子を、誰か他の人が聞いた」と(大齋院が)おわかりになるために、(齋院の御所の人、自分たちが聞いていること)知られたいものだ」などと言つて、「なるほどもつ

人二人許歩み寄り、気色バメル、  
 兼子ヨリ女房二人許居  
 タリケリ。

ともなことだ」と言つて、寢殿の丑寅の隅の妻戸には、人が訪れて、女房に会つて、用件を言う場所であり、「住吉の姫君の物語」を描いた障子がそこに立てられてあるが、そこに二人ほど歩み寄り、それとなくいることを知らせると、その前から女房が二人ほど話をして座っていた。

語釈・語法

【八丁ウ】

2 東の塀の戸より入りて、東の対の北面の軒に

「東の塀の戸」とは、東門の築地塀の戸から入つたのであるつ。

「東の対の北面の軒」とは、寢殿造で寢殿の東側にある建物の北側の軒下。「北面」は、奥の方にあり、女房などのいる内輪の部屋である。

4 御前の前裁、心にまかせて高く生いしげりたり。『全書』には「當頁二行目、うち

解けにたらん」とあるに應ずる。庭の植え込みが手入れしないので氣ままにのび放題に繁つてゐる。」とある。興味に富んでいた齋院御所は、大齋院と



寢殿造(『デジタル大辞泉』小学館  
 ジャパンナレッジ・オンラインデータベース  
<http://japanknowledge.com> による)

女房達が老境に入ったことにより、人々の訪れが絶え、緊張感に欠けるようになった。「御前」は既出（全注釈 其の二 p.14）。「前裁」は『字類抄』三巻本（『尊経閣善本影印集成 18・八木書店・一九九九年』）に「センザイ」とある。本集には三例（八オ4・一七ウ6・二五ウ6）があるが、仮名表記は本用例のみ。



『字類抄』三巻本  
（巻下世植物付・一〇七オ3）

5 つくるふ人 庭の手入れをする人。『字類抄』では、一巻本に「治シヨウ」（略）  
繕シヨウ（略）<sup>己高</sup>、黒川本に「治シヨウ（略）繕シヨウ（略）<sup>己高</sup>」とある。「つくろふ」は、本用例の他に一例（二五ウ6）ある。

6 露は月の光に照らされて 本用例を含め、「露」の漢字表記は三例（二四オ5・一七ウ7）、仮名書き三例（二四オ8・一七ウ6・五〇オ10）、「しじゆ」一例（五二ウ7）である。全七例中、四例は和歌で使われている。

7 きらめきわたり、あたり一面にきらきらと輝いている様 本用例のみ。  
他に「きら〜し」（二五オ6）、「きら〜と」（一七ウ6・六四オ4・二二〇ウ4）（「きりめく」（二九ウ9）がある。『名義抄』『新撰字鏡』には「きりめく」の訓なし。『字類抄』には、三巻本「衆モトメ（略）<sup>己高</sup>」、黒川本「衆モトメ（略）<sup>己高</sup>」とある。

7 虫の声ムシノネ『今昔』は「虫ノ音」。本集における「こゑ」の用例は本用例を除き、七例（八ウ9・四七ウ9・五四オ9・七〇ウ5・七六オ1・一一三オ2・一一三オ3）。全て「こゑ」と仮名書きである。人間の声五例、仏イミ（様元）に入っている（たおれ）の声一例、箏シヨウの声一例、虫ムシの声一例である。

8 遣水の音ヤリウ「遣水」は、寝殿造などで、庭に川の水を導き、小川のようにした流れ。本集における「音」の用例は本用例の他に、十例（八オ9・九オ1・九ウ7・二三オ8・二六ウ6・七〇ウ6・七七ウ2・七七ウ6・九九ウ4・一一三〇オ

4。正用「おと」は二例（九ウ7・九九ウ4）。他はすべて「を」と。人間・鬼のたてる音（話し声・足音等）五例、仏の足音一例、遣水の音一例、箏の音一例、碁石の音一例、音信の意二例である。

8 のどやかに流れたり。「のどやか」は静かで穏やかな様。本集には他に一例（二六ウ5）。『名義抄』観智院本、『字類抄』には「のどやか」がない。ただし、『字類抄』では「一巻本に「遅トカシ」「長閑ナガトク」、黒川本に「遅トカシ」「長閑ナガトク」が見られる。この後、「のどやか、ひやかか、はなやか」と「やか」が頻用されている。接尾語「やか」については「接尾語ヲカ・ヤカとその派生語」<sup>9</sup>（『語構成の研究』p.361・阪倉篤義・角川書店・一九六六年）に詳しい。

9 露ツゆをヒとする人なし。副詞「つゆ」の「露」字表記は二例。他十例（四〇オ8・四六オ2・五〇オ10・六五オ8・六七ウ4・七二ウ2・八〇ウ10・九四オ3・一〇〇オ3・一〇九オ5・一一三オ5・一一三オ7・一一三ウ4・一一三五ウ4）は全て「つゆ」と仮名表記。ここは、すぐ前に「露は月の光にてらされて」とあるので、これにひかれた表記であろう。

9 船岡フネノカミのおろしの風かぜ 秋冬の頃、山腹の空気が冷えて吹きおろす風のこと。「おろし」は「下」「風」の字を当てる。船岡は、現在の京都市北区紫野にある山。標高一二二メートル。山頂は平安京の南北の中心線（朱雀大路）の延長上にあり、造都の基点とされたと考えられる。四神のうち北をつかさどる玄武になぞらえられ、「枕草子」に「岡は船岡」（新大系・二三一段・p.21）と記されている。子の日の小松引きや若菜摘みなど、平安貴族の遊楽の地であるとともに修法・葬送の地でもあった。多くの歌に詠まれた歌枕でもある。

10 冷ヒヤやかに 冷たく感じられる様。本集では、本用例と二行後の二例のみ。「冷」「寒」の字のよみは、『名義抄』『字類抄』に「ヒヤカニ・ヒヤカナリ・ヒヤノカニ・ヒヤノカナリ」を見出せる。「ヒヤカニ」は『名義抄』（観智院本）に「寒ヒヤ」、『字類抄』一巻本・三巻本に「冷・寒ヒヤ」、「ヒヤカナリ」は『名義抄』（蓮成院）に「冷ヒヤ」、「ヒヤノカニ」、『字類抄』（黒川本）に「冷・寒ヒヤ」、「ヒヤノ

カナリは名義抄(観智院本)の「冷」にある。語構成としては、「ひや+か」「ひや+やか」が考えられる。

【ハウウ】

1 うち揺るべ 揺れ動くこと。『字類抄』では二巻本に「揺」三巻本・黒川本に「揺」<sup>ユウ</sup>とあり、「ユルク」の清濁がはつきりしないが、「ゆるべ」とよんでおく。「ゆるく」の全用例「うちゆるく」「本用例」「ゆさく」とゆるく「(一七二七)」「ゆるるまゆるるま(一七二七)」「ゆるるま(一七二七)」(三)「たゆるるまにゆるるま(一七八〇)の清濁表記を見ると、『総索引』『岩波文』『全註解』『全訳注』は全て濁音表記、『全書』『新大系』は混用 よみにゆれがあることがわかる。

1 薫物 本集用例は、他に一例ハウウのみ。沈香・白檀・丁香・麝香・白膠・薰陸など種々の香を粉末にして蜜で練りあわせて作った練香。

1 香 本集用例は、他に一例(ハウウ)のみ。かおり。におい。

1 えもいはす 既出(セウ)。

2 香はしく かがりがよい。においがよい。本集用例以外に、「うすいろのきぬの、いみじうかうはじきを(五四四四)」「いとかうはじきみちのくにかみにつゝみて(九二〇五)の二例があり、いづれも同じ意味である。

2 冷やくかに匂ひいでたる香をかくに」「ひやくかににほひいづ」は、『今昔』の該当部分も同じ表現。前出の「ひやくかに(八〇一〇)では、船岡のおろしの風 ひやくかに吹きたれば」とある。これに従えば、「ひやくかににほひいづ」は「ひやくかに(吹く風の中に)匂ひいづ」と解釈するべきである。「ひやくか」は、角川古語大辞典(角川書店・一九九九年)に「風・水などが肌に冷たく感じられるさま」とある。『源氏物語』の用例からみても「ひやくかに」が直接「匂ひいづ」を修飾することはない。『源氏物語』で「ひやくか」と「匂ふ」の関連した用例をみると、総角巻の「あめはひやく

かにうちそよぎて、秋はつるけしきのすこまに、うちしめりぬれ給へるに、ほひどもは(新大系四・P.42)や東屋巻「風はいとひやくかにふきいりていひしらすかほりくれば」(新大系五・P.176)など「ひやくか」は「あめ」「風」とつながった用例のみで「ひやくかに」が直接「匂ふ」を修飾する事例は『源氏物語』にはみえない。こも「ひやくかに」は「匂ふ」を直接修飾するとはみず、「冷やかな風が吹いてくるにつれて匂い出してきた香」となる。

3 かく 鼻でにおいを感じる。『本集』では本用例のみ。『総索引』では嗅字を当てる。『今昔』の該当部分では「聞クニ」。

3 御格子は下ろされたらんに」「みかうし」の本集用例は、他に一例(ハウウ)。「今昔」隔子。細い角材を縦横に組み合わせ黒塗りにした建具。廊のこと。寝殿造りの四面の柱と柱の間にはめ、上下二枚にして、上のは外方へ

つり上げ、下のは掛け金で止めておくようにする。「れ」は尊敬とみる。それは「御格子」と「格子」に「御」をつけていること、ハウウの「月御らむすとて、おはしましけるまんにや」から、この場合「格子」の上げ下げが大齋院の意思によると思われることの二点の理由による。したがってここは「御格子を」は下ろされたらんに」と解する。さらに、無生物を主語とする受

身形は、また、『古本説話集』の時代には一般的ではないという理由にもよる。なお、「に」の用法は逆接。

3 にほひ 本集ではこの一例のみ。直前の「たき物の香」はもっぱら嗅覚的に表現したとみるのに対して、「にほひ」は嗅覚的な表現でなくあたりの雰囲気をもあわせて表現しているとみる。

4 はなやかなれば 本集用例は、他に一例(四三〇六)。本話での意味は、香りなどのきわだつて強いさまであり、四三〇六「ひたちのかみなるひと

のはなやかなるあり」の「はなやか」は、権勢がある、時めくの意で、やや意味が異なる。『今昔』の該当部分は「花ヤカ二聞ユレバ」とあるが、これ

は、『新大系』によれば「聞ゆ」とよみ、かおりがあたりにただよふの意味

とする。

5 風に吹かれて、「れ」は受身、吹かれているのは御簾。

5 御几帳少し見ゆ。御簾が風に吹かれて奥の几帳が見える意。

6 いまだ 否定の語を伴う場合は事柄の非実現状況を表わし、否定の語を伴わない場合は、事柄や状態の継続を表す。本集の用例は三例。否定の語を伴うものは、二例（ハウ6・二四ウ7）、否定の語を伴わないものは、一例（二二三オ6）。

補説1

6 下ろされぬなりけり。「れ」は「尊敬」とみる。「けり」は、前から事実としては存在していたにもかかわらず、それまで気づかれていなかったことに、そのとき気づくことを表わす。「発見のナリケリ」で説話的興味につながる。

7 月御覽す 主語は大齋院。「御覽す」の本集での用例は全十例で、主語は大齋院二例（ハウ7・五ニウ1）、藤原道長一例（二六ウ6）、醍醐天皇三例（二四オ10・二二〇オ5・二二〇ウ5）、上東門院彰子一例（五六オ9）、釈迦仏一例（ハ三ウ8）、帝釈天一例（ハ六オ1）、天竺の帝一例（ハ六ウ6）と、場面の中で最高位の人物である。上巻五例は「御らむす」、下巻五例は「御らんす」に統一されている。

補説2

7 おはしましけるまんにや。「まんに」は、そのような状態が継続しているさま。「まんにや」は名詞「まんに」に、否定の助動詞「なり」の連用形「に」、係助詞「や」の付いたもので、「や」の下に「あらん」が省略された形である。「まんに」に否定の助動詞が接続した例は、本用例の他に「これはみしゆめのまんにけり」（二二四ウ10）一例がある。本集の「まんに」の用例は全三十一例で、この二例の他は、「まんに」に助詞「に」を伴って接続助詞のように用いられている。「まんに」二十六例、「まんに」に「て」を伴った「まんにて」二例、副詞「ありのままに」二例がある。齋院の御所に入った殿上人たちは、御格子がまだ下ろされていない理由に思いをはせる。

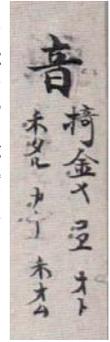
8 奥深き 深みがあり、奥ゆかしい感じである意。本集での用例は、この一例のみである。『源氏物語』に、「そのことをいとほのかにかきならし給へるもおくふかきこなるに、いと心とまりはて」（新大系四・横笛巻・P55）の用例がある。

8 箏 倭名類聚抄に、「箏 柱附 蒼頡篇云箏 形似瑟而短有十三絃 玩瑠箏譜云柱高三寸 諸本集成 倭名類聚抄 索引篇 一九六八年・P199）とある。「箏」に同じで弦楽器の一つ。胴の上に十三本の弦を張り、各弦を柱という駒で支え、その位置によって音の高さを調整し、右手の爪で弾く。平安時代には他の弦楽器（琴など）から区別した。和文系の文献では、『蜻蛉日記』『宇津保物語』『源氏物語』『紫式部日記』に「さうのこ」と「さうの琴」の用例が見られる。『名義抄（観智院本）』『字類抄（三巻本）』は、「シヤウノコト」。

8 平調 雅楽十二律の音名の一つで、基音であるき越を西洋音楽の二の音としたときの水の音である。本集での用例はこの一例のみ。『源氏物語』紅葉賀巻（源氏物語大成・P26）では、「さうのことはなかのほそをのたへかたきこそせけれとてひやうてふにをしくたしてしらへ給」（大島本）とある。また、池田本は「ひやうてふ」となっている。古辞書に「平調」の語はなく、『字類抄（黒川本）』には、「平文」「雙調」とあり、「ヒヤウ」「テウ」のよみがある。

9 調む 「調ぶ」に同じ。本集では、①楽器の音律を合わせ整える、②楽器を奏でる意に使われている。本用例は①の意である。本用例以外には、「調む」二例（ナオウ・一〇オ8）、調め合はず 一例（一〇ウ3）がある。「調ぶ」の例はない。

9 音 箏の音色を「こゑ」と表現している。『名義抄（観智院本）』により、「音」字をあてる。



・『名義抄(観智院本)』(法上四十八才一)

8 奥深き筆の平調に調められたる音の、筆ののには連体格で、「音」にかかる。「音」の「の」は主格。深みのある平調に調整されている琴の音が、となる。

10 さは 接続詞、それでは意であるが、「こ」では「ああ、そうか」と得心の意をあらわすものとする。」さの本集での用例は全十七例で、副詞を「に助詞」「は」が付いたもの三例、接続詞十四例である。会話文に九例、心中言に七例、歌に一例見出せる。本用例は、「さは……なりけり」の形で、殿上人たちの、そこまでに起こった事態について全体的に納得し、すばらしいと感動している様子をあらわしている。

10 かける事 「かせに……ほのかに聞こゆるに」(ハウ5・10)までの内容をあらわす。

10 あさましくおほゆ 「あさまし」は既出(全注釈 其の一、p.12)。風が吹き、御簾が動き、薫物の香が漂う。その匂いに殿上人たちは、月を愛で、琴を奏で、風雅をたしなんている齋院の御所のすばらしさに気付く。風(触觉)、香(嗅覚)、月(視覚)、琴の音(聴覚)を感覚的に受け止め、ちやうどそこに居合わせたという偶然のすばらしさに心酔する。『紫式部日記』には齋院について、「院はいと御心のゆへおほして、所のさまはいと世はなれかんとさびたり」(新大系、土左日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記、p.304・長谷川政春他校注、岩波書店、一九八九年)とある。

【九一才】

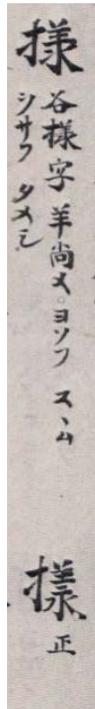
1 今昔「は」楽一ツ許有し」とする。一曲ほど弾くくじいこの時間である。

1 調められて、「られ」は、受身の助動詞。

2 帰りまいりなん」と「ん」は、「と」の右に傍記。「今昔」は、「今八内二返り参ナムト為ル程」とする。「まいりなん」の「い」は、「ぬ」の仮名違いで、既出(全注釈 其の一、p.11)。

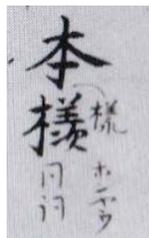
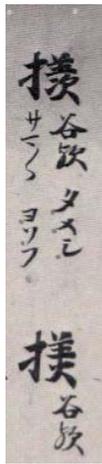


3 人々のいふ様、本用例の「様」は、原本「様」。『名義抄(観智院本)』によると、正字は「様」、俗字「様」。「様」字類抄(黒川本)に例がある。



・『名義抄(観智院本)』(仏下本三二ウ)

・『字類抄(黒川本)』(上三八ウ6)



3 おかし「おかし」は、正用「をかし」(全注釈 其の一、p.15に既出)の仮名違いである。本集での「をかし」の用例は九例で、すべて上巻にあり、本例を除く八例六才3・七才4・九ウ9・一八九ウ2・三七才10・五一才8・五一ウ3・五四才5)は正用である。他に「をかしげなり」五例があるが、上巻の三例は正用、下巻の二例は仮名違いである。「をかし」「おかし」両用があるが、正用「をかし」が優勢である。

3 御有様を「人間」けり。本集の用例は、「御有様」六例、「有様」三

例である。「有様」は齋院の御所の雲囲気全体を指し、「聞く」はその中のボイントである琴の音を聞くのである。「有様を聞く」の用例は、本集「これかありさまきよてこそかへらめ」（二二ウ5）、「源氏物語」「たゞまかせきこえ給て、もてなしきこえ給はむありさまをまぎし給へ」とをしふ。（新大系二・薄雲巻・p.218）、「宇津保物語」「大将の御ありさま、おほやけわたくしの天下のさえ、かたち、心ありさまを見きくこし少し思ひなぐさむ心ちすれど」（大系三・樓上下・p.462）、などがある。

4 思し召されん料に「思し召す」の主語は、大齋院、尊敬の助動詞「れ」がつくことで、より高い敬意をあらわす。本集の「思し召す」の用例は全十二例で、主語は大齋院三例（九オ4・一〇オ2・一〇オ10）、藤原道長一例（三オ5）、観音三例（七ウ4・一〇オ10・一〇ウ1）、帝釈天一例（八七オ7）、仏一例（八八オ4）、醍醐天皇一例（二二ウ6・二二ウ9）である。「料」は、形式名詞「…ため」の意。本集の「料」は全七例で、本用例と同様の意は、他に三例（二八オ8・六四オ10・一三ウ5）ある。名詞用法「何かに使用する物」二例（九九オ9・九九ウ1）、名詞「ある物を作るための材料」とも、形式名詞「ため」とも解釈できるもの一例（六三ウ3）である。『名義抄（観智院本）』  
『字類抄』（二巻本・黒川本）には、「料」の音表記「レウ」がある。

4 知らればや 受身の助動詞「れ」に終助詞「ばや」がついている。『総索引』に、「受身の助動詞に「ばや」のつく例は稀」と指摘がある。『今昔』の該当部分は、「女房二令知バヤ」と使役である。本集での「ばや」の用例は全九例で、上接語が助動詞であるのは、本用例以外一例「やをらこれをつりてはや」（九八オ7）で完了の助動詞である。動詞は九例（二五ウ4・三〇ウ4・二六オ3・五三オ4・九七オ1・一三〇オ9・一三〇オ10）があるが、受身とはつきりあらわす例はない。殿上人たちは齋院の御所にいることを、御所の人や大齋院に知られたいと思っている。

5 寝殿 「東の対」（八オ3）に対する中央の建物で、大齋院はここに起居す

る。本集の「寝殿」の用例は全四例。本用例以外の三例は、仮名表記「しむてん」で、すべて上巻第二十八「曲殿姫君事」に見える。

補説2

6 丑寅の隅 「丑寅」は、方位を十二支にあてて呼ぶときの、丑と寅の間にあたる方角。北東。陰陽道などで鬼門とされるが、ここではその意はない。寝殿の東対の北東の角。

6 妻戸 語源『家屋雑考』に次のように説明されている。「妻戸は、殿の四隅にありて、主客とも出入する戸口なり、妻戸、狐戸等の字を用ふるは、いづれも訓を借り用ひたるにて、端戸の義なり、ツマとは、すべて物のはしをいふ名なればなり、（略）」（廣文庫第十三冊・p.33・物集高見・廣文庫刊行會・一九一六年）。妻戸は「端戸」の意で、寝殿造で殿舎の四隅の出入口に設けられた、両開きの板製の扉である。『宇治拾遺物語』卷三「一五」南のおもての、西のかたなる妻戸口にぞ、常に人にあひ、物などいふ所なりける。（新大系・p.94）をみると、妻戸口は、一般に人が訪ねて来て会う場所と考えられる。

6 人のまいりて、…そこには立てられたる、挿入句。妻戸と、そこに立てられている障子絵の説明がされている。

7 住吉の姫君の物語の障子 「物語」は仮名表記で、「ものかたり」で一語であるが、「ものかた」までが九丁オ7の行末にあり、「り」が九丁オ8の行頭にある。二行にまたがっているので、九丁オ7にまとめた（凡例）。二本文

9 の項参照。住吉の姫君の物語は古本「住吉物語」で散逸、現存する「住吉物語」は鎌倉時代に改作したもので、継子いじめの物語である。「障子」は室内を仕切る障屏具の一種で、現在の襖にあたる。現在の障子は「明かり障子」と言っていた。『総索引』には、「黒川本字類抄「障子シヤウシ」。今昔は「障紙」と書くことが多いが、『障子』が正しい。（p.17注三）とある。

補説5

9 気色ばめば 「気色ばむ」は、気持が外にあらわれるの意。本集の用例は、この一例のみ。思いもよらず齋院の御所に入った殿上人たちは、そこに

ことを知られたく、音を出すなどのそぶり以示したのである。『今昔』の該当部分「気色バメル」の注には、「案内をこつために咳払いをして存在を知らせる。」(新大系四・P161)、「声づくろいをしたところ。」(大系四・P98)とある。  
 10 物語してゐたりけり 原本「て」に、みせけち。『今昔』は、「二人許居たりけり。」とする。

**補説1 六丁オ7「まだ」と八丁ウ6「いまだ」**

『日国』「いまだ」の語誌<sup>(3)</sup>には、次のような説明がある。  
 平安時代には「いまだ」から変化した「まだ」という語が発生し、「いまだ」と同義で和文專用語として用いられるようになった。それに対して「いまだ」は漢文訓詁にもっぱら用いられたため、否定との呼応が強く意識されるようになった。

「いまだ」の初出は、『日国』によるが、『古事記』上巻(大系・P101)、「まだ」の初出は、『伊勢物語』三段(新大系・P81)である。「いまだ」から「まだ」に変化した過程については、明らかにされていないが、「いまだ」が先であるのは間違いないようである。

本話には、以下のように「まだ」と「いまだ」が各一例ずつ見られる。

- 六丁オ7「またみやたちにて」
- 八丁ウ6「みかうしもいまだおるされぬなりけり」

築島裕氏は、『平安時代語新論』(東京大学出版会・一九六九年)の中で、「まだ」「いまだ」を、陳述副詞の中の「否定表現をともなふもの」の例としてあげ、「陳述副詞は、位相論的に見ると、その差違を最も顯著に現してゐる品詞である。殆どすべての陳述副詞が、和文と訓讀の中の何れかの位相のみに属するものである。両者に跨つて共通に使用される語は極めて少い。」(第三章文法第

二節体言 第一項副詞・P450・傍線は筆者による)と述べ、さらに、「略、同じ意味を表す語が、漢文訓詁語と和文語との間に、對立的に見出される(同書・P82)とし、例の一つとして、「イマダ まだ」を挙げる。

本集には、「まだ」十二例(「また」一例含む)、「いまだ」三例の用例があり、「まだ」が優勢である。「まだ」は十一例中八例(六オ7・三七ウ3・九四オ5・九四オ6・一〇二ウ3・二三オ4・二九オ4・三〇ウ5)が、「いまだ」は三例中一例(一三三オ6)が否定辞を伴わない。なお、三三三丁オ7・七七丁ウ8の「まだ」は両例とも「又」の字である。存疑。

『今昔』には、「まだ」二例、「いまだ」三三二例の用例があり、「いまだ」が優勢である。「まだ」の用例二例(巻四第三八・巻四第五二)は、いずれも和歌用例で、大字のカタカナ書きで表記されている。

なお、「いまだ」について、『今昔』(大系二)の「未ダ(否定辞を伴わぬもの)」(P38補注)の項目で、次のように述べる。

今日一般の常識としては、口語マタには否定辞を伴わぬ用法があつても主として漢文訓詁的語調に用いられる文語イマダにそのような使いざまがあることは破格のように考えられているが、本冊における事実はその故無きを証明する。

『今昔』「いまだ」の三三二例を調査すると、否定辞を伴つもの二五二例、伴わないもの七十例である。否定辞を伴つものが八割弱と優勢である。

なお、『今昔』における否定辞を伴わない「未だ」七十例が修飾しているもの大半は、「幼稚三例」・「幼(稚)し」五例・「弱冠三例」・「年若し」四例・「若し」十一例・「童」一例、計二十七例は年端もいかなない若い状態を示すものであり、否定辞を伴わない用例の四割弱を占める。ただし、本集にはそのような傾向は見られない。

本集では、「まだ」が優勢、『今昔』では、「いまだ」が優勢であり、両説話集の文体の違いを明確に表していると言えるだろう。

補説2 字音語における韻尾の表記

1 六丁ウ6 感じ

「感」字について、本集の表記事例は以下の仮名書き二例である。

「かむしたてまつらせ給ける」(六オ6)

「かみ いみしうかむしあはれかりて」(五八オ9)

『字類抄(三巻本)』に、音表記のある十五語について、他の古辞書をも含めて、次表のとおり確認した。

【表の見方】 「x」 語なし 「/」 読みなし

語	色葉字類抄		類聚名義抄
	前田本	黒川本	
感	三巻本	三巻本	観智院本
感悦	カムス	カムス	禾カ ム
感欣	カムエツ	カンエツ	x
感荷	カムカ	カンカ	x
感欣	カンキム	カンキン	x
感化門	カンクワ門	カンクワ門	x
感會	カンクワイ	カンクワイ	x
感興	カムクワン	カンクワン	x
感心	カムケウ	カンケウ	x
感情	カムシム	カンシン	x
感城樂	カムセイ	カンセイ	x
感結	カムセイ樂	カンセイ樂	x
感歎	カムソ	カンソ	x
機感	カムタム	カント	x
持感	キカン	キカン	x
	ヘンカム	ヘンカン	x

2 八丁ウ7 月御らむす

「覽」字について、本集の表記事例は以下の十例である。

【御覽す】御らむす(ハウ7) ・御らむし(二六ウ6) ・

御らむせ(二四オ10) ・御らむし(五二ウ1) ・

御らむすれ(五六オ9) ・御らんし(八三ウ8) ・

御らんし(八六オ1) ・御らんせよ(八六ウ6) ・

御らんせ(二〇オ10) ・御らんすれ(二〇ウ5)

用例全十例中、上巻五例は「御らむす」と仮名書き「ム」表記、下巻五例は「御らんす」と仮名書き「ン」表記に統一されている。『字類抄』『名義抄』に記載されている「覽」(ラム・ラン)の音表記のある三語について、次のとおり確認した。

【表の見方】 / (斜線) 欠巻・欠落 「x」 語なし 「/」 読みなし

語	色葉字類抄		名義抄
	前田本	黒川本	
覽	三巻本	三巻本	観智院本
高覽	カウラム	カウラン	呂敢反
博覽	ハクラム	ハクラン	x
遊覽	イウラン	イウラン	x
	ユウラム	ユラン	x

『字類抄』では、二巻本は「博覧」「遊覧」が「ラム」で、三巻本は「高覧」「博覧」が「ラム」、「遊覧」が「ラン」、黒川本は「高覧」「博覧」「遊覧」ともに「ラン」である。前田本(二巻本・三巻本)は「ラム」表記が優勢で、黒川本は「ラン」表記で統一されている。なお、『韻鏡新釋』(前掲書)には、「外轉第四十合、半舌音、来母、敢韻、清濁、一等」(ám)とある。

### 3 九丁オ5 しむ殿

「寝」字について、本集の表記事例は以下の四例である。

【寝殿】しむ殿(九オ5) ・ しむてん(四四オ5)  
しむてん(四四ウ5) ・ しむてん(四六オ5)

「寝」は、全四例すべて仮名書きで、「ム」表記である。『字類抄』に記載されている「寝」(シム・シン)の音表記のある三語について、次のとおり確認した。なお、『名義抄(観智院本)』に「寝」の音表記は見られなかった。

【表の見方】(斜線) 欠巻・欠落、x 語なし、読みなし

語	色葉字類抄	
	前田本	黒川本
寝	三巻 シム	一巻 シン
寝殿	シム	シン殿
寝席	シムセキ	シムセキ
就寝	シムニツク	シンニツク

『字類抄』(三巻本)前田本は「寝」「寝席」「就寝」が「シム」、前田本(二巻本)は「寝殿」が「シム」、黒川本は「寝席」が「シム」表記である。黒川本「寝」「寝殿」「就寝」は「シン」表記である。なお、『韻鏡新釋』(前掲書)には、「内轉第二十八合、齒音、清母、寝韻、次清、四等」(ám)とある。

### 補説3 六丁ウ7・七丁オ3 院と大殿の贈答歌について

院よりおほとのにきこゑさせ給ける。

ひかりつるあふひのかけをみてしかば年経にけるもうれしかりけり

御返

もろかつらふた葉なからもきみにかくあふひや神のしるしなるらん

この部分については、『大鏡』との違いが指摘されている。これについて、『御堂白記』の記事を参考に検討する。この贈答は『大鏡』以外に、『栄花物語』と『後拾遺集』にある。まず、両作品の該当部分を抄出する。

『栄花物語』上(大系・p.24)

中宮の若宮、いみじういとつづくつて走りありかせ給。今年は三つにならせ給。四月には、殿、一條の御棧敷にて若宮に物御覽せさせ給。いみじうふくらかに白う愛敬つき、うつくしうおはしますを、齋院の渡らせ給折、大殿「これは如何」とて、若宮を抱き奉り給て、御簾をかげさせ給へれば、齋院の御輿の帷より、御扇をさし出でさせ給へるは、見奉らせ給なるべし。かくて喜れぬれば、又曰、齋院より、

光いづる葵のかけを見てしかば年経にけるも嬉しかりけり

御返し、とのゝ御前、

もろかつらふた葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらん

とぞ聞えさせ給ける。

『後拾遺集』(新編国歌大観1・p.137)

後一条院をさなくおはしましける時まつりこらんじけるにいつきのわたり侍けるをり、入道前太政大臣いだきたてまつりて侍けるをみたてまつりてのちに太政大臣のもとにつかはしける

選子内親王

1107 ひかりつるあふひのかけをみてしかばとしへにけるもうれしかりけり

かへし

入道前太政大臣

1108 もろがつらふたばながらもきみにかくあひひや神のしるしなるらん

『栄花物語』と『後拾遺集』においては、道長と齋院との贈答であり、若宮（後一条院）だけが同席している。歌も同じ文言である。

『大鏡』の場合は齋院と太宮（彰子）との贈答になっており、同席しているのは當代（後一条院）と東宮（後朱雀院）つまり幼かった二人の皇子たちである。歌の文言にも多少の違いがある。

次に、『栄花物語』『後拾遺集』と『大鏡』との違いを、『御堂関白記』の記事と対照させて検討する。『御堂関白記』（講談社学術文庫上中下・倉本一宏・二〇〇九年）から必要事項を抄出する。

・寛弘五年（一〇〇八）九月十一日、戊辰。皇子敦成誕生（上・p.364）

・寛弘六年（一〇〇九）十一月二十五日、丙子。皇子敦良誕生（中・p.48）

・寛弘七年（一〇一〇）四月二十五日、甲戌。賀茂祭使遣立ノ敦成親王、小南第に渡御ノ賀茂祭使の遣立の儀を見た。若宮は、一条大路に出られた。傳大納言（藤原道綱）と中宮大夫（藤原行信）が、若宮の御車後に伺候した。（中・p.80）

・寛弘八年（一〇一一）四月十八日、辛酉。賀茂祭ノ敦成親王・敦良親王、見物

「暁方、内裏から若宮（敦成親王）三宮（敦良親王）尚待が同行されて、一条第の棧敷に出られた。巳から午剋の頃、公卿たちも参会した。」（中・p.137）

『御堂関白記』と照合すると、『栄花物語』の記事は寛弘七年四月二十五日の賀茂祭の出来事となり、寛弘五年誕生の「中宮の若宮」は、今年は三つである。一方、『大鏡』の記事は寛弘八年四月十八日の記録に該当する。ただ、どちらにも道長と齋院の出会いや歌の贈答の記事はない。この点については、『後拾遺集』が勅撰集であることや、『栄花物語』の「後一条院」の年令が正確であることから、両作品の道長と齋院の出会いや歌の贈答歌の文言も含めての記事は、史実と認めたい。

『大鏡』の場合は歌の贈答が齋院と太宮（彰子）との間のものであり、歌の

文言にもわずかな違いがある。賀茂祭の年時が異なるので当然と考えることもできるが、贈答歌の意味は殆ど同じなので、『大鏡』の場合もこの贈答歌が採用されたと考えられる。『大鏡』の太宮（彰子）について誤りという説があるが、『大宮』は『大殿』の誤りかとみるよりも、むしろ『大鏡』の意識的変改、

西親王の御母に対して贈歌した女性どつしの親しさをにおわせたことみたい。

（『日本古典文学全集』頭注五・橋健一校注訳・p.174）という考え方もある。これに従えば、歌も、意識的変改をしたのではないかと思つ。なお、大系本では、「太宮（彰子）」（底本・東松本）となっているが、全集本では「大宮（彰子）」（底本・平松本）とする。

以上のことを踏まえて、本集の贈答歌について考える。本集の、齋院と道長の贈答が、『大鏡』では、齋院と「太宮（彰子）」の贈答になっていることについて、高橋買氏は次のように述べる。

『大鏡』が大齋院と太宮（彰子・筆者注）との歌の贈答とするのを誤り、あるいは意識的に変えたとする両説があるが（『日本古典全書』古典文学大系・古典文学全集・大鏡）、いずれにせよ本集の撰者は『栄花物語』等に従って作者を訂正したとみてよい（なお、『栄花物語全注釈』は、『古本説話集』のよった『大鏡』本文が現存本と違つと述べるが、私はここではこの説はとらない）。これらの諸点から判断すると、『古本説話集』撰者は『大鏡』によりながら『大鏡』の本文をまる写ししたのではないことがわかる。（『全訳注』p.68）

この高橋氏の、撰者による「作者」の「訂正」という考え方をさらに進めて、本稿では、本集編著者の「意識的変改」と見たい。この贈答場面で齋院と道長のエピソードをまとめあげるといふ意識によって、編著者は歌の贈答場面と歌については、『栄花物語』と『後拾遺集』の記述に従つたと考える。第一話で「道長」は「入道殿」「殿」「大殿」と呼ばれているが、この場面の「道長」の呼称は、「殿」「大殿」で、『栄花物語』と同じである。

第一話は大齋院の一生を語るものである。前半は賀茂祭を舞台に、齋院の華やかな半生を道長とのエピソードを中心に描いている。従って贈答歌も「道長」と「齋院」との間のものでなければならず、「この」「大宮」が登場すればまじりかなくなるといえるからである。『大鏡』は、贈答歌の後に「げに賀茂明神などのうけたてまつりたまへばこそ、一代までつちつゞきさかへさせたまらめな。この事、いとおかしうせさせたまへり」と、よの人申しに、前の帥のみぞ、『追従ぶかきおいきつねかな。あな愛敬な』と申給ける。」(p.124)とある。本集の編著者にとって、この部分には必要ないものであった。

補説4 七丁ウ4 雲林院(うりんゐん)と齋院

「雲林院」は、下図に示すとおり「齋院」と距離的にも近く、「雲林院」に出かけた上達部達が「齋院」に立ち寄る例が歌集の詞書きなどに見られる。

そこで、「雲林院」に出かけた人物と「齋院」女房との贈答と思われる歌の例を、『新編国歌大観 CD・ROM版』等により調べた。歌集の成立順に示すと、次のとおりである。(但し、『大齋院前御集』の場合は、齋院と深い関係にある人物とが「雲林院」に関わる歌を詠んだものを拾い出した。)

1 『大齋院前御集』上巻

ただまき雲林院の念仏ききにきたるくるまの、夜ぶくるとにきこゆれば

馬

223 くもあよりのりのくるまぞかへるなるにしかたぶく月やあふらむ

進

224 よそののみ( )とのほかゆくへるまゆあつきよにめくる月をこそおもへ

2 『大齋院前御集』下巻

なにかなごいひて、さねかたのせうしやうつたよまむなむとちるるほむ

つりぬんにかねつくおとのきこゆればあはれがりて

318 さよふけて風にたくへるかねのおとはものおもふ人の身にそしみける

しのびの中將



3 『大齋院御集』

雲林院のはなみに殿上人ともいきて、たかまつどのの中將 中門のもとにいりたまで

15 われこそみつればはなのほひを

とあれば

ほどもなへつるふ色をはるのうさむち

又はなみにいくときけど、このたびはまるる人もなければ、いみじうながきやなきをもて、

いとのもとにはとはいはせれば

16 ちりぬべきはなをのみこそみにきつれ思ひもよらぬあをさぎのいと

4 『入道右大臣集』(類聚)(道長次男) 1065没

上卿 はなみること、観音院のかたより雲林院をながめてかへるほどに、さいゐのくるまにて、ものみてすべしにふみあり、みれば、しめのうちのはなはなにもあらぬなる

しとありし。

8 かげをいたみまつやまへをそたつねつるしめゆふはなはちらじとおもひて

5 『後葉和歌集』一書下（115頃成立）

上達部花をみるとて、観音院より雲林院を見はへりて、かへりけるあひだに、齋院に車たて、物みてかへるとて、しめのうちの花はなにもあらぬなるべしと申したりける返事に

堀川右大臣

64 風をいたみ先山ちをそ尋ねつるしめゆふ花はちらじと思ひて

6 『続詞花和歌集』二書下（116頃成立）

上達部上の人人雲林院の花見けるに、齋院女房のもとよりしめのうちはなはかひなき花とせつそこ侍りければ

堀河右大臣

67 風をいたみまつ山へをそ尋ねつるしめゆふ花はちらじとおもへば

7 『実家集』春（1183～1186頃成立）

こ大納言となくにの卿の、いまださい相の中將ときこえしとき、はなみむといざなはれしを、さはることありておそくゆきたりしかば、雲林院のかたと人いひしに、そなたをさしてゆきたるに、齋院にまゐりて、人人、はなのうたいまみあはせんとせしほとなり、ただあらむよりはとて、ふかくもおもはず。

34 はる風ははなさそふらしなみのつへにきえせぬゆきのありすがはかな

8 『新千載和歌集』一書上（1359頃成立）

雲林院に花見にまかるとてさそひ侍りけるに、齋院の女房又ちがひて白河の花にともなはんと申しおくり侍りけるに、いでぬるよしを申しければいひつつかはしける

読入しらす

97 さそへども君も梢の花みにとひとりそまとふ春のひぐらし

1 『大齋院前御集』上巻こ2 『大齋院前御集』下巻 3 『大齋院御集』に登場する人物は、『大齋院サロンのメモバール』（平安朝サロン文芸史論）目加田さくを・風間書房・二〇〇三年）と目される。同書（P197～202）によると、「進」と「馬」は前御集時代の内部の女性メンバー、「ただまさ」は内部の男性メンバー、「さね

かた」と「しのびの（しのぶる）中將」は外部の男性メンバーである。また、「たかまつどのの中將（頼宗）」は御集時代の外部男性メンバーである。

4 『入道右大臣集』（頼宗）は道長次男「頼宗」の私家集である。同じ歌が私撰集の5 『後葉和歌集』と6 『続詞花和歌集』に入集されている。詞書の趣旨は同じであるが、表現は簡略化されている。「かげをいたみ」の歌を詠んだ時の齋王が大齋院であるかどつかは分らない。「選子」退下二〇三一年の時三十八才の「頼宗」は後冷泉天皇（在位1065～1068）の終わりの頃、一〇六五年に没している。3 『大齋院御集』であげた歌の場面では「たかまつどのの中將」とよばれているので、「かげをいたみ」の歌を詠んだ当時は「選子」以後の齋王の可能性もある。

7 『実家集』になると、「実家」の生没年（1145～1193）と「さねくに」の生没年（1140～1178）から、二人の時代は近衛・後白河・二条・六条・高倉天皇の頃であり、齋院の主は特定できない。また、8 『新千載和歌集』の成立は二三五九年で南北朝時代になる。齋院は順徳朝二年め、令子内親王退下（1212）で廃絶となるので、当歌集の歌はそれ以前の成立となる。

以上の例から、『新編国歌大観』によるかぎり、「雲林院」と「齋院」は「大齋院」の時代から「齋院」の廃絶近くまで、「雲林院」に出かけた上達部・殿上人と「齋院女房」との交流の場になっていたことがわかる。

### 補説5 九丁オ7「住吉の姫君の物語の障子」と「大齋院」

雲林院帰りに齋院に立ち寄った殿上人達は、外来者が訪れる寝殿の丑寅の隅の妻戸に立ち寄るが、そこには「住吉の姫君の物語の障子」が立てられていた。『今昔』も同じである。挿入される形で当然のように紹介されている「住吉の姫君の物語の障子」は「大齋院」と深い関係にあるように思われる。

『上代倭絵全史』（家永三郎・名著刊行会・一九九八年）の「住吉物語絵」の解説

を引用する。

源氏物語繪巻に「玉鬘が物語絵をさま／＼見ながら、すみよしのひめ君のさしあたりけむあり」を、我が身の上にはいき／＼へて感慨にふけるさまを述べた直後に、「らうたげなるひめ君のものおもへるみるに云々」とあるは、花鳥余情の説く通り、住吉物語を受けたものと解せられ、逆境になやむ女主人公の懊悩の姿を画いた場面を含む住吉物語絵の一端を想像することが出来るが、最近堀部正二氏発見の新資料により、史上実在の作品としての住吉物語絵の内容を精細に窺ひ得るに至った。すなはち圖書寮本能宣集に「すみよしのものがたりゑにかきたるを、うたなきとこころ／＼にあるべしとてあ(欠字)。」と「カ(こころのおほせ)とてよめる。」として、ならひの池の辺に姫君を求る場面、住吉に向はんとして神雨備森を過ぐる景、同じ道中鹿の萩の中に鳴くさま、住吉の浜に道遠する情景、「心ほそしとおもひてひめきみのあるところ」等七場面に附せられた歌が載って居り、(中略)この物語は古本住吉物語によるものであるから、現行本とは多少内容を異にして居り、皇室博物館等に現存する住吉物語絵巻の残欠は鎌倉時代の作で現行本に拠つたものであらうとのことである。

猶今昔物語集によると、後一条院の代の末に、選子内親王の居処の寝殿の丑寅の角の戸の間に、住吉の姫君の物語を画いた障子が立てられてあつたと云ふ、物語絵を障子に画くのは異例であるが、後出伊勢物語障子、扇流物語障子の例もあるし、又明月記寛喜三年二月八日条にも「相門以物語歌可令書障子絵之由一昨日被命」れたことが見え、必ずしも左程珍らしいことではなかつたらしい。(p.37) 328)

『新編国歌大観七』の『能宣集(書陵部感)』に歌の順は前後するが、七場面に歌が付されている(歌番号・328・329・330・317・318・319・320)。「すみよしのものがたりゑにかきたるを、うたなきとこころ／＼にあるべしとてあ(欠字)。」と「カ(こころのおほせ)とてよめる。」は、「能宣」が「住吉物語絵」のなかに「歌」を詠み込むように命じられたわけであるが、「おほせ」と「といふことば」から依頼者は高貴な人物ということが分かる。「上代倭絵全史」別冊「上代倭絵年表改訂版」(家永三郎・墨水書房・一九六六年)によると、「能宣」が歌を詠んだの

(二六)

は、天禄三(972)年になっている。この年は円融朝三年目、天皇は十三才、選子九才、「能宣」五十一才の時である。この翌年天禄四(973)年の「円融院扇合」(『新編国歌大観』五)に「あか色のあふぎにすみよしのかたを絵にかきて、あしでにかける」扇がもちだされている(歌番号5)。「能宣」も参加しており、「草木も思ふことあらじ万代は君が扇の風になびきて」(歌番号14)と詠んでいる。問題によるこの歌合は「円融天皇」(十四才)と同腹の姉「一品宮實子内親王」(十八才)との間で催されたものである。この天禄三(972)年・天禄四(973)年の出来事から、「円融天皇」を中心に「すみよし」といふものを考えることができる。つまり、あ(欠字)。「と」「カ(こころのおほせ)と」は「円融天皇」の命令ととれる。「あるところ」は「選子内親王」(石川徹『平安時代物語文学論』古本住吉物語の内容に関する臆説・笠間書院・一九七九年・p.80)あるいは「選子その人ないし、それとかわりある人」(稲賀敬『源氏物語その文芸的形成』延喜・天曆期と源氏物語とを結ぶもの、大斎院のもとにおける新版「住吉」の成立、大学堂書店・一九七八年・p.59)といつ考え方もある。稲賀氏はさらに「選子内親王」のさまざまな状況を鑑みて、「円融天皇」の関わりに言及し、次のように述べ

選子は兄円融天皇が讓位する前、齋院にととまる事の利点を説かれた。その時、円融天皇の示唆で作られた『住吉物語』は、選子が齋院の生活を続ける心の支柱として、一方では齋院の障子に絵として描かれ、選子は晩年に至るまで、それを円融天皇が自分のために残した生活指針として朝夕眺めていた。(前掲書p.107)

次に、天皇が齋院のために障屏具を贈つた例を示す。選子以前の齋院に、天皇が関わつた屏風の例が一例ある。「醍醐天皇」が「宣子内親王」に贈つたものである。宣子内親王(九〇―一九二〇)は、醍醐天皇第二皇女、母は光孝天皇皇子源旧驥女、更衣の封子。十四歳で賀茂齋院に卜定され、宣旨により紀貫之らが齋院の屏風の和歌六首(『貫之集』60～65、『拾遺』246)を詠進している。(『平安時代史事典』・角川書店・一九九四年)

この「齋院の屏風」を『上代倭絵全史』別冊『上代倭絵年表 改訂版』によつて確認する。（漢数字は年表中、時代順に付された作品番号である。）

- ・二五四 延喜十五年閏二月廿五日 齋院御屏風  
 女共滝のながれに出る花をみあるは手をひたしあらひたる 貫之集一
- 二五五 女の寺詣に山路につれてゆく（…春がすみ道さまたけに立わたらん） 同
- 二五六 大の木のもとにやすみて川こしに桜花をみたる所 同
- 二五七 旅人の道にありて帰雁の雲に 同
- 二五八 人の家に春花をみたる 同
- 二五九 をんなやなぎの枝をひかへてたり 歌仙家集本貫之集一
- 二六〇 藤の松にかゝれる 貫之集一
- ・二六一 同年 齋院御屏風  
 春（香をとめて誰折らざらむつめの花あやなしかすみたちなかくしそ） 歌仙家集本躬恒集
- 同（降る雪にいろはまがひぬ梅のはな香にこそ似たるものなかりけれ） 拾遺集春
- 二六一 女ども梅の花見つつ若菜つむ 歌仙家集本躬恒集
- 二六三 人きのもとにあり（あつさよはるの山べをさがりたみ…） 同
- ・二六四（類 収） 齋院屏風  
 （かりにとて来へかりけりや秋の野の花みる程に日も暮ぬべし） 拾遺集秋
- ・二八一 延喜十六年 齋院御屏風四帖 歌仙家集本貫之集一
- 二八二 人の木のもとにたちてはるかなる桜の花を見たる 同
- 二八三 池のほとりに咲ける藤のもとに女どものあそびて花のかけを見たる 同
- 二八四 たきのほとりに人きて見る 同

- 二八五 うみのほとりにおひたる松のほとりにみちゆく人のやすみたる所 同
- 二八六 雪の庭にみりける 同
- ・二八七（類 収） 桃園に住み侍りける前齋院の御屏風  
 （白妙の妹がころもにうめのはな色をも香をもわきぞかぬる） 拾遺集春
- ・二八八 ちもその齋院の屏風 同 雑春  
 （梅の花春よりさきに咲きしかどみる人まれにゆきの降りつつ）
- ・三三五 延喜十七年 齋院御屏風 歌仙家集本躬恒集 拾遺集  
 秋（水のおもふかくあさくも見ゆるかな紅葉のいろや淵瀬なるらん）
- 三三六 松にかかれるこけを見る 歌仙家集本躬恒集
- 三三七 野にこたかがりす 同
- 三三八 田かる（小山田のおくての稲をかりつみてまもるかり庵にいく夜へぬらむ） 同
- 三三九 紅葉ちる 同
- 延喜十五年、十六年、十七年と毎年「齋院屏風」が調製されている。天皇が齋院に贈った「齋院御屏風」はこの年表で知るかぎり、醍醐天皇が宣子内親王に贈ったこの例のみである。選子が齋院に入った時、これらが残されていたかどうかは分からないが、他に齋院の障屏具についての記録はなく、大齋院の許にあった「住吉の姫君の物語の障子」は貴重な存在であったと思われる。さらに、「物語絵」「障子絵」について、前掲『上代倭絵全史』・『上代倭絵年表 改訂版』により略述する。「物語絵」については、温子没（延喜七・90）以前に存在した「生田処女塚物語絵」（出典。大和物語）が「物語絵の初見と云ふべき」（『上代倭絵全史』p.37）とあり、次が「住吉物語絵」になる。『上代倭絵年表 改訂版』でも「住吉物語絵」までに「物語絵」は見られず、「住吉物語絵」は「物語絵」として「作めであったと言える。この「住吉物語絵」が、もし「障子絵」であったとすれば、「物語絵の障子」として初めてのものではあったとも言える。

これについて、前記の『図書寮本能宣集』には、「七場面に附せられた歌が載つて居るとするが、天曆六（952）年・天徳（958）二年の障子絵もほぼ同数の場面が設定されている。具体的に挙げる。

・天曆六（952）年『上代倭絵年表改訂版』P.77

八四一 女いなりにまつでたる所 朱雀院御障子絵

八四二 よし野川にくれくたす所 歌仙家集本元真集

八四三 広沢の池のほとりに女とものねぬなはくる 同

八四四 さがみのあしがらの間にたび人ゆく 同

（あしがらの間にしげれる玉こすげ行かふ駒もすさめざりけり）

八四五 いではのやしさに舟にのりて人あそぶ 同

八四六 みちのくにのあさかの沼のほとりに京よりくだれる人たちとまれり 同

・天徳二年（958）（P.86）

九二六 ふかき山に鶯の声聞人あり 御障子絵

九二七 霞立る山より滝おつ 西本願寺本忠見集

九二八 岸のほとりに藤花さける 忠見集

九二九 柳桜ある家 同

九三〇 霧立て紅葉の木どもかくせる所 同

九三一 山里なる女鹿のねを聞て 同

九三二 おきないねはこびつまず 同

九三三 歌仙家集本忠見集

これらの例から考えると、天禄三（972）年には成立していた「住吉物語絵」は、「障子絵」であった可能性もある。選子が齋院に入ったのは貞元二年（972）、「住吉物語絵」に歌が付けられたのは天禄三（972）年であれば、選子が齋院になった当初から、「住吉の姫君の物語の障子」は齋院にあったということにな

る。『住吉物語』は『枕草子』（新潮日本古典集成下・第百九十八段・一九七八年）に「物語は、住吉（P.106）と、物語の最初に挙げられている。これ以前の文献としては、菅見によれば『能宣集』の「すみよしのものがたりゑにかきたる」のみで、これが『住吉物語』の初出ということにもなる。そういう意味で『住吉物語』という物語そのもの、それを「物語絵」にしたもの、それを「障子絵」にしたもの、これは当時非常に珍しく、注目されたに違いない。それは多くの訪問者の目にするところとなり、人々の口から口へと伝わり、巷間に広まっていったと思われる。

「大齋院」退下(101)後、「この「障子」はどつなつたである。」『無名草子』に始と同じ記事が載るが、この「障子」への記述は全く無い。「齋院」は「順徳朝」二年め、令子内親王退下(1212)で廃絶となるが、『無名草子』の成立(1196頃)とほぼ同時期である。平安期すでに物語を絵として楽しむことが行われている。『源氏物語』も成立当初から、絵画化されたと言われ、「長秋記」元永二(1119)年十一月二十七日の条に、源氏絵調進の記事があることなどから、「住吉の姫君の物語の障子」は忘れられた存在になっていたのかもしれない。

(なお、『住吉物語』については、堀部正二「新資料による住吉物語の一考察」、『中古日本文学の研究』所収・クレス出版・一九九九年)、石川徹「古本住吉物語の内容に関する臆説」、『平安時代物語文学論』所収・笠間書院・一九七九年)、稲賀敬二「延喜・天曆期と『源氏物語』」を結ぶもの、大齋院のもとにおける新版『住吉』の成立(『源氏物語』その文芸的形成)所収・広島一九七八年)等に詳細な検証がなされている。)

「其の」に「意見」を指摘をいただき、表記等を一部訂正いたしました。

(二〇一七年十月十六日・受理)